opusdei.org

# 「太陽の日の夜明 け」:聖体賛美式と 聖母マリアの交唱

土曜日ごとに聖体賛美式を行い、聖母マリアの交唱を唱えることによって、私たちは日曜日の祝祭のための準備をし、私たちの二つの偉大なをもいるキリストとマリアを結びつけるのです。

2025/07/06

「太陽の日と呼ぶ曜日には、町ごと 村ごとの住民すべてが一つ所に集 い」団と、聖ユスティノは初代信者の聖体祭儀についての描写を始めています。それはキリストの死から一世紀余り後のことでした。「太陽の日」に主が復活されてから、キリスト者は週の初めの日に欠かさず集まり、パンを割くことをともに祝らまり、ました。彼らはまもなくその日をDies DominiまたはDominicus、つまり「主の日(主日)」と呼ぶようになりました。

オプス・デイで行われている信心でいる信心を共通して連備としての事価としての事のを共通して持っている特別で、主曜日に独特ので、土曜日のではいるからでいるがあります。大学のではないではないではないではないではないではないではないではないがあればいののではないがあればいのがあれたちを訪れるで、カ1・78参照)太陽の光の前触れで、

数時間のうちに輝きはじめるのです。ですから、太陽の日のあけぼののようなものなのです。

## 観て味わう

聖体顕示と賛美式の歴史的な起源 は、中世における聖体(エウカリス ティア)に関する霊性と神学の発展 の中に見られます。聖体にキリスト が実際に現存していることを否定する人に答え、それに反駁する教祭の祭体、「キリストの聖体」の祭端となったボルセーナの奇跡となったボルセーナの奇いとなったがは、信者の間で聖人の大きなとは、信者の一ブメ列のの下き引き起こした。聖体の前での跪拝、聖体の前での跪拝、聖体に対する崇敬とは、聖体に対する崇敬における聖霊の働きかけによるものでおける聖霊の働きかけによるものた。

聖体によって霊的に養われるために、信者の間で聖なるホスチアを観想するという熱意が育まれていったのです。これは、Manducatio pervisum(観て味わう)と呼ばれました。いずれにしても、ひとつ問題が起こりました。聖体を見ることは、ミサの聖体奉挙のときに限られていたのです。それゆえ、14世紀にドイツのいくつかの教区では、ミサ聖祭

以外のときに長い時間聖体を顕示しておく習慣が広まっていきました。この聖体顕示は、聖務日課(時課の典礼)や聖体の祭日のミサから採られた聖歌(Pange lingua, O salutaris Hostia, Tantum ergo, Ecce panis angelorumなど)で活気づけられました。これらの聖歌の歌詞は、聖トマス・アクイナスが作ったものです。

ミサ以外での聖体礼拝は、以後数世紀をかけて、特にトリエント公会議(1543-1563年)以降、広まっていきました。第二バチカン公会議に続いて行われた典礼の刷新では、引き続きこのような聖体礼拝を実践していくことが奨励され、ミサ聖祭との緊密なつながりが強調されました。

「秘跡の中に現存されるキリストを 礼拝するときは、この現存がミサの いけにえに基づくものであり、秘跡 的で同時に霊的な交わり(聖体拝 領)を目指していることを記憶すべ

きである | 図。 聖体顕示や聖体賛美 式は、ミサから生まれミサへと導く ものであり、一日の別の時間に自然 とミサの祝祭の継続をもたらしま す。聖体礼拝は、私たちが四六時 中、聖体に心を向けている「聖体の 人 になるよう助けてくれます。 「そうすれば、主のもう一つの心遣 いに感謝するようになることでしょ う。主は、ミサの犠牲が捧げられる ときのみ祭壇に留まってくださるだ けでなく、聖櫃の中に安置される聖 なるホスチアのもとにいつも現存す ることになさったのです | <sub>国</sub>。

# 歌い出さずにはいられない心

日曜日の前晩に聖なる処女マリアへ 特別な敬意を表すことは、教会にと ても古くからある伝統です。その起 源は、おそらくマリアを中心に使徒 たちが集まった聖土曜日でしょう。 弟子たちの心は暗闇と不安に支配さ れていましたが、使徒と信者の模範 であるマリアは、この世における御子の現存を継続させるものとない、 した。中世の著述家ハイスターバッは、のカエサリウス(1240年帰天)は次のように説明しています。「キリストが死んで墓に葬られ、皆がだけていた聖土曜日に、マリアだけでもで変活への信仰を持ち続けていた。土曜日の聖母信心は、主のとできる上間。

地域によっては、古くから主の日に加えて土曜日を、日曜日のプロローグや〈兄弟〉のように、さまうでまずるで、土曜日に聖マリアカールクでを捧げる習慣は、神学者でカールクルを持ていた。とびなります。では、聖人の記念を行わさらいまどなくして土曜日の時課の典に、ほどなくして土曜日の時まの日のに、ほどなくして土曜日の時まの出た人です。典

礼で「聖母マリアの小聖務日課」を唱える習慣が広まりました。

13世紀には、イタリアでLaude(賛 歌)として知られる夕方の信心が現 れました。それは、一日の終わりや 週末に行われる賛歌を伴う儀式のこ とで、この賛歌にはかならず聖母に 捧げられた聖歌、とりわけサルベ・ レジナが含まれていました。後に Laudeは、ピクシス(聖体携帯容 器)に収められた、あるいはオステ ンソリウム(聖体顕示台)に顕示さ れた聖体のキリストの現存の許に行 うことが一般的になりました。参加 者はLaudeの終わりに聖体による祝 福を受けて、解散しました。このよ うに、イエスの永遠の現存を崇拝す る伝統と、特に土曜日に処女マリア を崇敬する伝統とは、教会において それぞれ個別に広まったのではあり ますが、幸いにも中世の終わりにひ とつになったのです。こうして、何

世紀にもわたって続くことになる典礼と信心の伝統が生まれたのです。

聖ホセマリアは、愛に溢れた心は歌 い出さずにはいられないと考えるの が好きでした。人間の歌によって、 どのように神に祈れば良いか、しば しば私たちに示してくれました。事 実、聖ホセマリアは頻繁に愛のセレ ナーデを聖マリアに捧げていまし た。「無原罪のおとめマリアのみ前 で、次のように歌ってあげなさい。 おめでとう、父なる神の娘、マリ ア。おめでとう、子なる神の母、マ リア。おめでとう、聖霊なる神の花 嫁、マリア。あなたに優るお方はた だ神のみ上ा。教会の歴史を通じ て、聖なる処女マリアへの賛歌が途 切れたことはありません。これは、 マリア自身がマニフィカトの中で、 「今から後、いつの世の人も、わた しを幸いな者と言うでしょう」(ル カ1・48) と告げたことを、確証する ものです。

## オプス・デイの草創期から

「聖母の貧しい人たち」を援助する ため、献金を行っていました。創立 者は、自身の父親が貧しい人を助け るという、この愛のわざを行うのを たびたび目にしていました。

聖ホセマリアは、オプス・デイにおいて聖マリアへの細やかな愛情を生きる理由を『鍛』のある項で説明しています。「毎土曜日と聖母の祝日の前夜、無原罪の御母に償いを捧げるべき理由が少なくとも二つある、

とあの友人が言っていた。第二の理 由。日曜日や聖母の祝日は(たいて いは村々の祝日になっているが)、 人々が祈りに精を出すどころか、見 れば分かるように、公の罪や主イエ スに対する破廉恥な罪を犯すことに 専念しているから。第一の理由。聖 母の良い子になりたいと思っている 私たちが、おそらくは悪魔にそその かされ、主とその御母に捧げられた 日々を、十分に心を込めて過ごして いないから。残念ながら、これらの 理由は今も当てはまるだろう。だか ら私たちも償いをしなければならな いのであるしけん

20世紀初めのスペインでは、 Sabatinaという信心業が教会や礼拝 堂でしばしば行われていました。これは、ロザリオやサルベ・レジナの ような聖母への祈りと賛歌で構成されており、短い説教が加えられることもありました。聖ホセマリアは、 バルバストロでは家族と一緒に、サ

ラゴサでは神学校でこの信心業に 与っていました。さらに、同時代の 他の多くの司祭と同様に、聖ホセマ リアも自身の司祭職の一部分とし て、度々聖体替美式をマドリードで 行っていたことがわかっています。 そして、オプス・デイの活動に参加 していた最初の人たちと一緒に、病 人援護会で、ポルタ・チェリの要理 クラスで、レデンプトール修道会の 教会で行われた黙想会で、DYA学生 寮で、土曜日と祭日や黙想会の時に 賛美式を行っていました。創立者 は、3人の学生のために行った最初 の聖ラファエル職のサークルを、聖 体替美式で締めくくっています。そ れは、1933年1月21日の十曜日でし た。祝福を与える際、聖ホセマリア は、若者たちとのこの使徒職が、何 世紀にもわたってもたらすであろう 実りを垣間見ていたのです。「聖体 を入れた顕示台を手に取り、高く掲 げてあの3人を祝福した。…そのと き私は300人、30万人、3千万人、3

百億人…の人々を見た。(中略)しかし、私の夢はとても追いつかなかった。半世紀たった今、それは現実になった。主は際限なく寛大であられたので、私の夢はちっぽけになった」図。

オプス・デイの歴史の一環として、 1931年12月、聖ホセマリアは、毎週 土曜日にセンターでサルベ・レジナ を歌うことに決めました。土曜日の 聖体賛美式については、聖母の交唱 を歌う習慣と結びついて、次第に家 族生活に定着していったのでした。

さらに、オプス・デイにおいては、 聖ホセマリアが望んでいたように、 ミサを一日中継続し、様々な信心業 の実践にミサの恵みが溢れ出るとい う観点から、聖体賛美式を理解する ことができます。ミサと聖体拝領の 恩恵のうちに、そしてその恩恵をと おして、日常生活を聖化するためで す啊。ですから、日々の活動のただ

中で(それこそ主が私たちを呼んで いるところなのですが)、この「ミ サの継続しのためには、聖体替美式 に与ることができなくても、聖体訪 間、射祷、霊的聖体拝領などの様々 な方法を利用することができます。 聖体替美式はオプス・デイの精神を 表す習慣のひとつではないかもしれ ませんが、聖ホセマリアの望みに よって、オプス・デイのセンターや 活動の中で自然に生まれた信心業で あることがわかります。特別な日、 典礼上の祭日やいくつかの祝日に、 家族の祝い日に、あるいは黙想会の ように主とともにゆったりした気持 ちで自身の内的生活の刷新を図る時 に、またいつも少しリラックスする ことができ、特別な聖体の日である 日曜日のための準備をする毎週土曜

日に聖体替美式を行うのです。

#### 霊的な地平線で

家族で日曜のミサに与ると、神のみ ことば、説教、聖体拝領、共同体の 交わりによって、私たちの生活の中 で神が身近におられることを実感す ることができます。土曜日に聖母の 交唱を歌ったり唱えたりすること、 また状況が許すなら聖体賛美式に与 ることは、一週間の中心となる日曜 日のミサのために私たちの霊魂を準 備し、聖体のイエスへの愛を深める ための助けとなります。これら二つ の実践はともに、主を拝領する望み を具体的な形で生き生きとしたもの にする手立てとなると言えるでしょ う。「望みは礼拝の喜びを取り戻し たときにのみ新たにされます。望み は礼拝へと導き、礼拝は望みを新た にします。なぜなら、神への望み は、神のみ前にいることでしか育ま れないからです。なぜなら、イエス だけが望みを癒すからです。何から 癒すのでしょうか? 必要の独裁から 癒すのです。事実、必要なことだけ を望むならば、心は病んでしまいま す。これに対して、神は私たちの望 みを高め、清め、癒し、利己心から 解き放ち、神と兄弟姉妹への愛へと 私たちを開いてくださいます!㎜。 ミサ以外の時の聖体礼拝は、秘跡と しての聖体拝領や霊的聖体拝領を熱 望するよう霊魂を導きます。礼拝は 一致へと向かうのです。聖母の交唱 は、マリアへの愛において私たちを 成長させます。マリアの使命はいつ でも私たちをイエスへと導くことで す。

この二つの信心業を毎週毎週繰り返すことによって、「真の信心の墓」 に言われる惰性に陥ったりしないためには、土曜日ごとに歌ったり唱えたりする聖体賛歌、聖書朗読箇所、祈りや連祷、聖母の交唱などが助文言をゆっくりと黙想することが助けになるでしょう。こうして、聖体顕示の沈黙のうちに、キリストとの

内的な対話に入っていき、歌ったり 読まれたりする内容を味わうので す。単に一息いれるというのではあ りません。人生で本当に大切なもの に近づくことができるように潜心す るのです。後で周りの人に伝えるた めです。「わたしたちのことばは、 いかなる場合も、神の偉大さを語る には不十分です。したがって、静か な観想の時を設ける必要がありま す。観想は、その内に秘めたすべて の力によって、すぐにでも福音を告 げ知らせたいという思いを湧き上が らせます。すべての人が神と一致す るために『わたしたちが見、また聞 いたことを伝える』 (一ヨハネ1・3 参照)という義務が切実なものとな るのです | [12]。同時に、典礼も私た ちがミサごとに潜心する姿勢を養う よう招いています。そうすること で、「耳に響いた神の言葉が心の中 で真に実現する上頭ようになるので す。

リアは驚くべき女性です。主が創造された中でもっとも素晴らしい被造物で、すべてが完璧です。彼女が褒め言葉を好んだとしても、それは欠点ではありません。だから、もうわかるでしょう。あなたも私もマリアを誉めたたえましょう」[14]。

[1] 聖ユスティノ『第一弁明』67,3 (『キリスト教教父著作集1 ユス ティノス』教文館、1992年、p. 85)。

- [2] 聖ホセマリア『鍛』70。
- [3] カトリック中央協議会『ミサ以外のときの聖体拝領と聖体礼拝』 80。
- [4] 聖ホセマリア『知識の香』154。

- [5] A. Heinz, Der Tag, den der Herr gemacht hat. Gedanken zur Spiritualitat des Sonntags, Theologie und Glaube 68 (1978) pp. 40-61参照(引用はp.55から)。
- [6] 聖ホセマリア『道』496。
- [7] 聖ホセマリア『鍛』434。
- [8] スペイン語原文は、A. Vazquez de Prada, El fundador del Opus Dei, vol. I, Madrid, 1997, p.482. 日本語訳は、「オプス・デイの最初のキリスト教的形成クラス」https://opusdei.org/ja-jp/article/saishono-keiseino-kurasu/を参照。
- [9] 特に『鍛』69、『知識の香』154 を参照。
- [10] 教皇フランシスコ、2022年1月6日のミサ説教。
- [11] 聖ホセマリア『道』551。

[12] 教皇ベネディクト十六世、第46回「世界広報の日(2012年5月13日)」教皇メッセージ、2012年1月24日。<a href="https://www.cbcj.catholic.jp/2012/01/24/7915/">https://www.cbcj.catholic.jp/2012/01/24/7915/</a>

[13] Misal Romano, Ordenación de las lecturas de la Misa 9.

[14] San Josemaría Escrivá de Balaguer a los pies de la Virgen de Guadalupe, SEDS, número especial, México, Ed. de Revistas. S. A. (1976年10月2日) に引用されている。

Fernando López Arias

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/taiyounohi-yoake/ (2025/11/29)